

歌囊井蛙談
上

土音
共三冊

中村俊定文庫

文庫 18

1011

1

觀





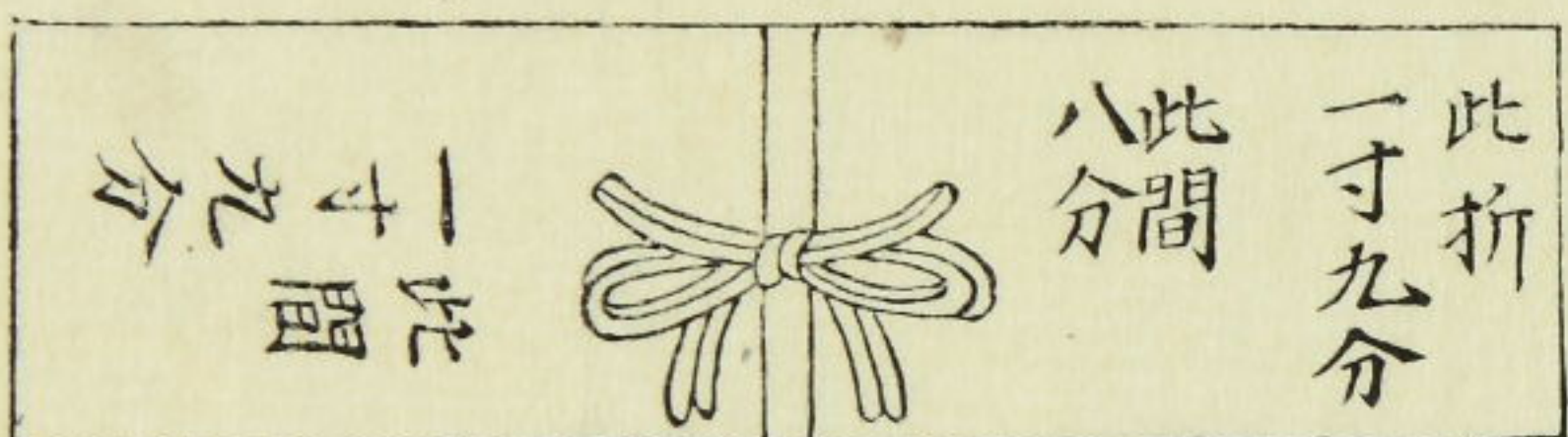
歌囊并蛙談

總豎長一尺二寸

濱頓延子百菴言滿著述



水引長
二尺一寸五
分二筋引
通前ノ方
ニテ結之



歌袋

為顯

以大法ノ子啼也
歌袋ノ名ハ此也
ト云ルハ此也

蘇七十五

或説曰

總豎長サ一尺二寸六分

水引長サ前
同シ
但白紅ナリ

歌袋ノ
二字ヲ
不書

爲顯

水引長サ前
同シ
但白紅ナリ

歌袋ノ
二字ヲ
不書

爲顯

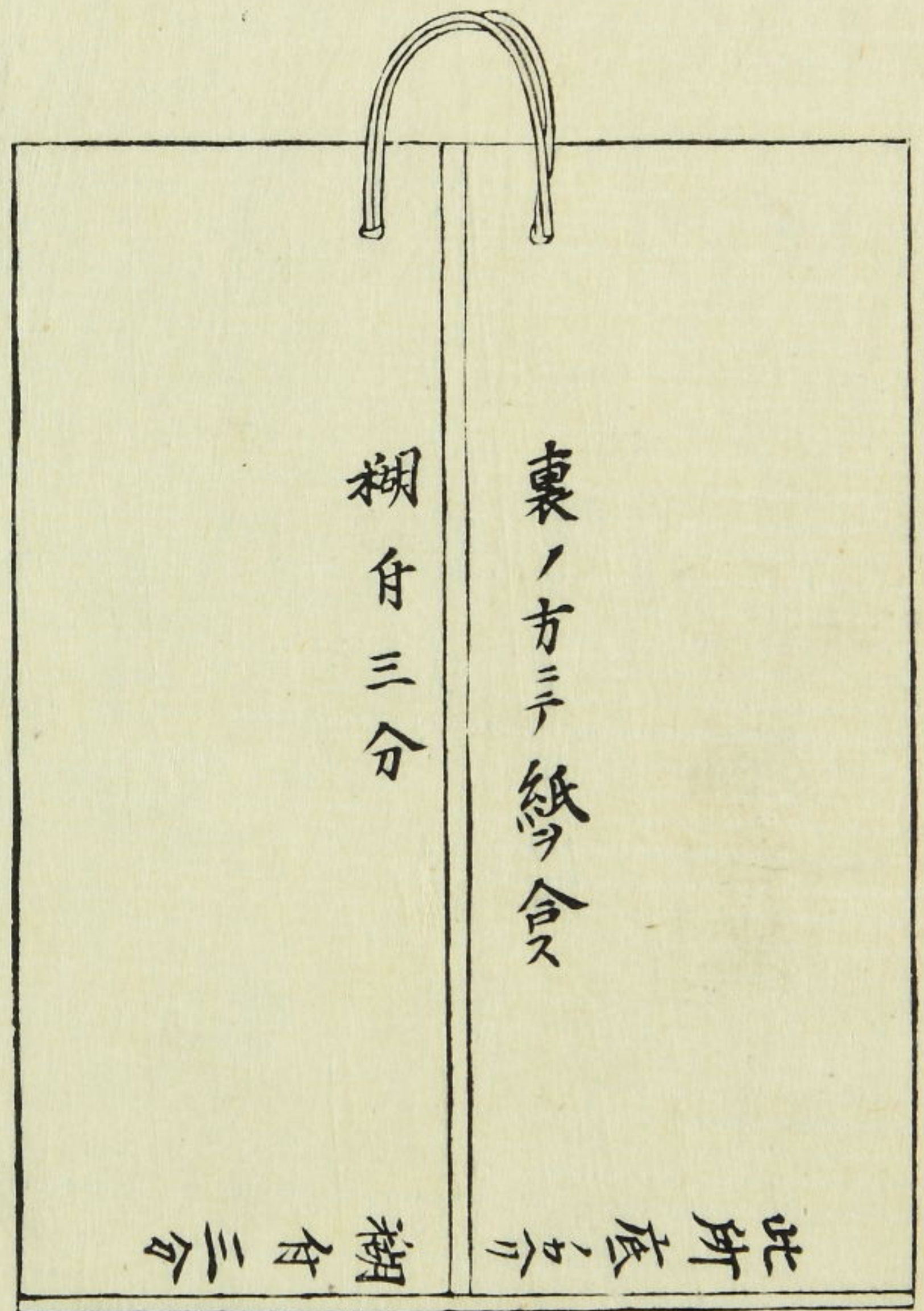
水引長サ前
同シ
但白紅ナリ

歌袋ノ
二字ヲ
不書

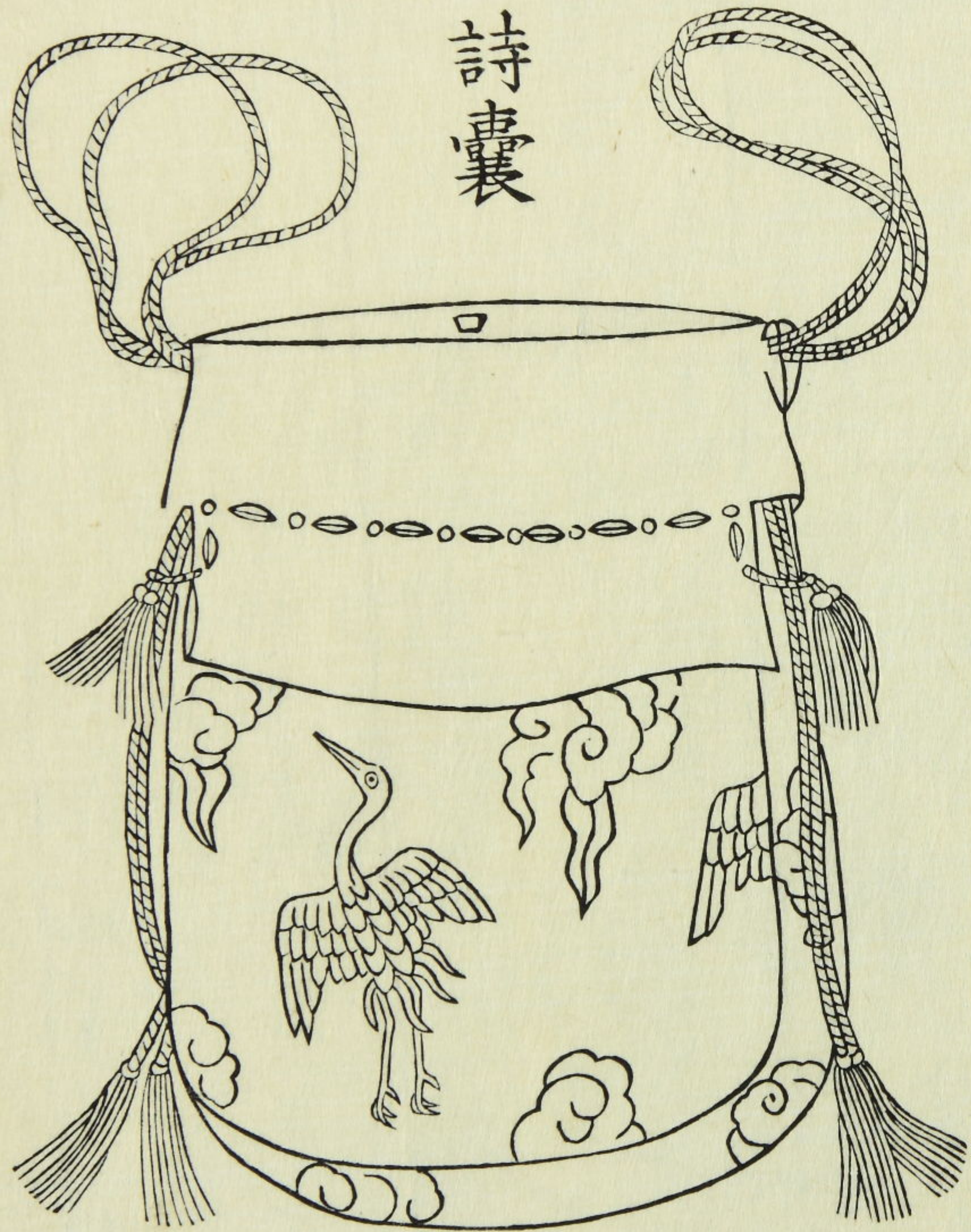
爲顯

折目ニテ二尺四分半

總長サ一尺二寸六分



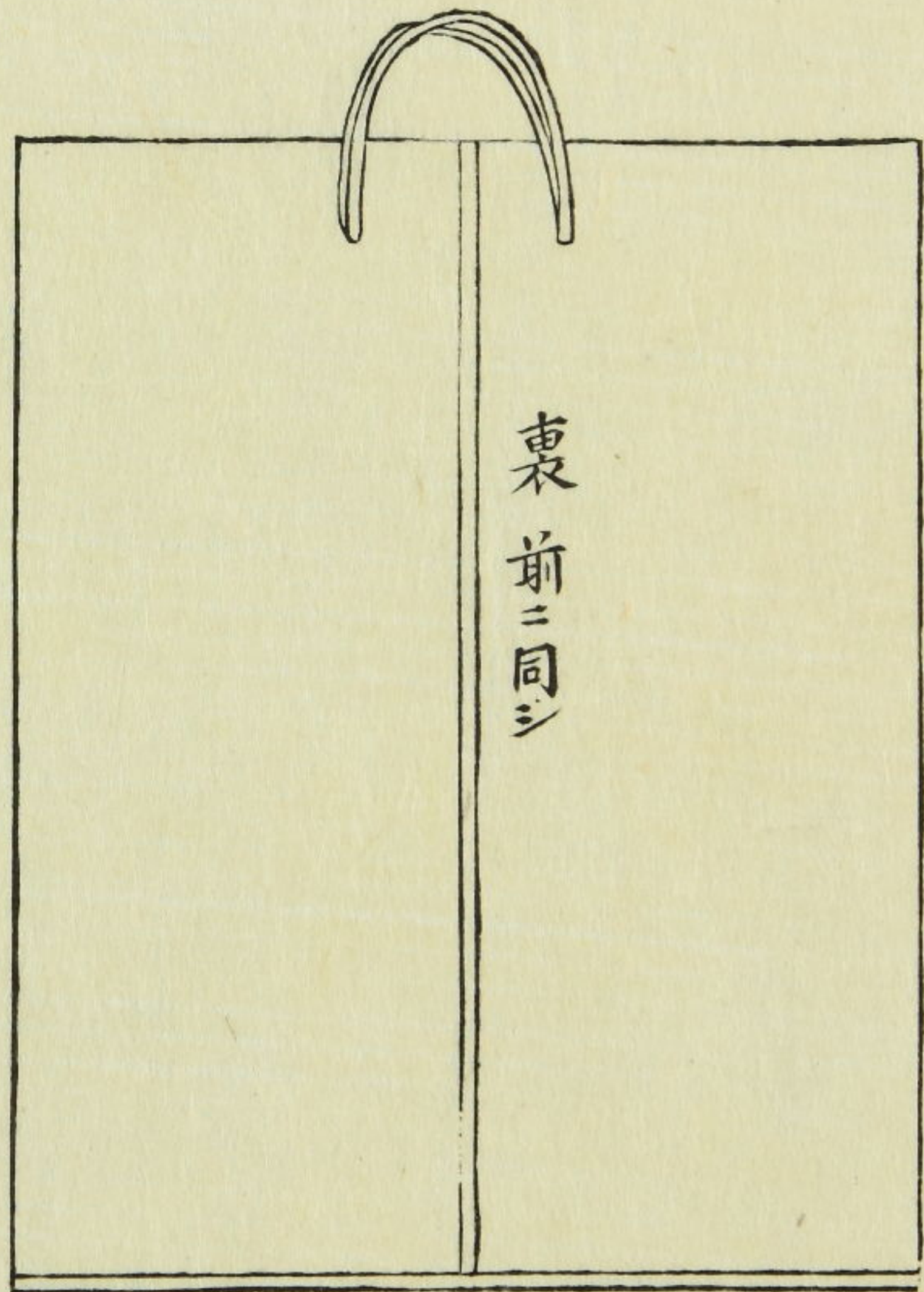
詩囊



次慶年佳炎二

三

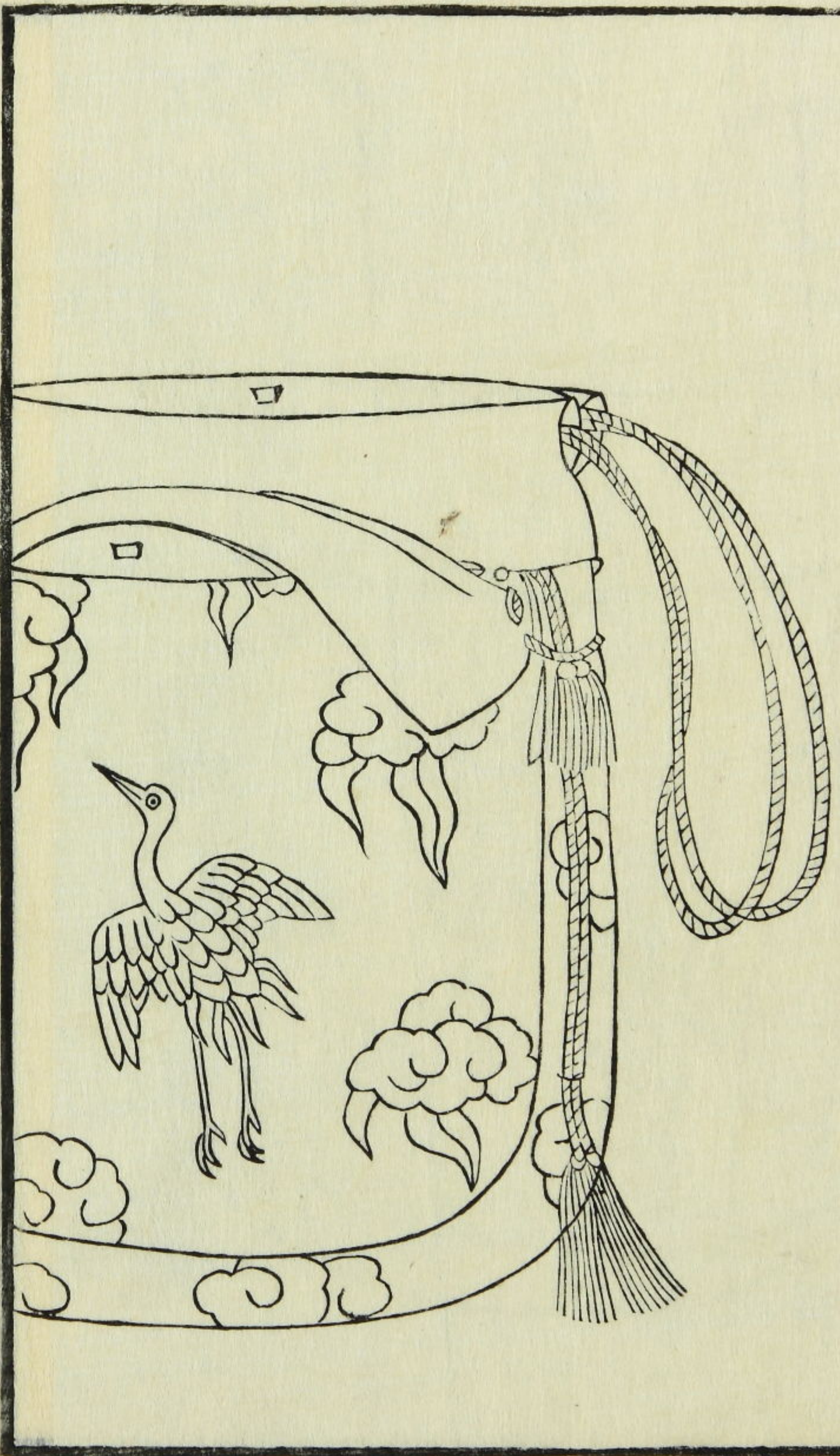
裏前二同シ



詩囊并如詩

二

横ヨリ見ルカタチ



歌囊并蛙談卷之上

○或説云歌袋寸法總豎長一尺二寸
 横七寸五分也紙多高檀紙水引長
 二尺一寸五分二筋引通前乃方にて
 結之、又白紙捻を二筋合せて勢を
 二筋引通し用ゆる夏毛有之、又當在
 用る紙捻を彩たる水引二筋引通し
 用る夏毛有之、雖狀爲顯時代に紙
 捻乃水引與之昔糸を水子浸して
 引合せより乃戻らぬやうにする故
 子水引等云歌に

水引乃あまの糸乃一筋にたをふらる乃よりにならぬ
連哥子

雨乃日夢あや水引の心也柳 昌純
朕の時を為顯乃時代を糸乃水引を
用る歟色を以て其の色を用るや不
知當を用る處乃紙捻糸水引乃色々
彩たるを後在の義又袋乃哥子書
様墨次如圖

○或説云總豎一尺二寸六分横八寸
四分是にを哥子名をかりを書て歌
袋乃二字を不書如圖但白紅乃水引

用之

○細川嘯翁先生 風竹亭或阿野實紀 去乃為一歳

東武子來給花橘町家に暫くたを
候一々の時常よまゆりて歌道乃故
實を承りてに舞乃口義曰為顯
哥袋を為取乃哥袋にして他子用由
魚子にあはれ以て獨笑一給て之は
ら乃哥袋を見せ給大高檀紙を折を
へて左右乃けきより詠草取木さむ
るなり糊を不用折形乃之なるを自
讚一給き水引を尋常紙白紅を用由

勿論哥在不書也

○言滿按吾老年乃今子至て哥囊に
三乃疑阿り為顯新哥袋と詩囊子と
少許きて造之軟又為顯以往子哥袋
少云物をやありて為歌蛙乃哥袋
よ免る軟又為顯乃蛙乃哥によりて
後人哥袋少云物を作てこ乃歌を書
付侍る軟蛙乃哥袋少詠る者姑人
一免なる由一亦乃哥と夫木鈔蛙乃
處子撰入之永仁元年楚忽百首藤原
為顯少有之永仁元年皇九十一代

伏見帝乃年号也夫木鈔と藤原朝臣
長清法名蓮昭撰之大江匡房夢告之
杖桑集可号之旨冷泉黄門為相卿相
談之杖桑日本名可憚之从彼命取扁
體号夫木鈔云云○亦乃集に多只蛙
乃哥子部類して撰之少をある由一
為顯乃心多愚なるに毛なる云あた
里吾身を蛙子比して蛙乃哥袋少よ
み又楚忽百首なる少魚るにおそ飛
合此建た毛一こ乃時子亦建を調て
抄乃詠草を毛以建れらるるや

○藤原為顯

大納言為家卿三男從五位上侍從早世無子孫卒去年月歲不知云云

○伊勢物語作者乃爭論在京極黃門云制

給之強不可尋其作者只可說詞花

言紫之而已豈仰之乎如甘風流之可愛歟

○正字通曰歌古阿切音箇平聲說文

詠也釋名人聲曰歌歌柯也以聲吟咏

有上下如草木有柯葉也書舜典歌永

言註志形于言必有長短之節略下說文

歌重文作謌漢藝文志作哥集韻或作

駱贅古作可今不從舉要又謌歌哥同

○袋度耐切音代囊也漢外戚傳中黃

門持詔記盛綠綵方底註厚綵方底盛

書囊形如今之算勝秦始皇時算袋即

算勝也唐武后賜朱前疑緋算袋今蒼

頭所攜貯筆硯者謂之照袋以鳥皮為

之又魚袋唐初職事官三品以上賜金

袋刀礪石一品以下有手巾算袋佩刀

礪石永徽中京官文武職事四品五品

並給隨身魚袋炙穀子曰魚袋古之算

袋取合魚符之義略下又沙袋以革為囊

○字彙云囊奴當切音諾平聲袋也有

底曰囊無底曰橐又小曰橐大曰囊

○言滿云唐詩賀知章囊中自有錢
 ○囊奴當切ノウ吳音也奴當切夕ウ
 漢音也本邦吳音ヲ多ク用ユルカ故ニ
 ノウナウト讀來レリ吳音ヲ嫌フ詩人モ
 唐詩選ニテ如此ル讀付ル故歟本邦哥詞ニ
 ヨミクハ讀付ナト云夏ヤリ如是義強不可
 泥歟又詩囊望云物あり鈴木氏自微
 所持寫之如圖又塵尾拈囊人望云夏を
 井道貞為夜話乃由勝龍水老生語云也
 ○發端ノ論は水引乃絲也麻苧乃苧也
 又蠶絲乃義也今俗水引苧望云是也

○麻謨加切音馬皮績為布舉要
 ○苧直呂切音除說文草也可以為繩
 又云與苧同麻屬可織布是亦舉要
 ○糸莫狄切音覓同絲省說文糸絲各
 大部糸細絲也徐鍇曰一蠶所吐為忽
 十忽為絲糸五忽也或云莫狄切者陸
 孫輩傳會分別之失也直當切音絲合
 為一據二說足正
 ○伊勢物語子
 玉乃緒をあらをにありてむはふを絶て乃後逢ふと誓ふ
 闕疑鈔云あらををあらをせたる緒なり

又清少納言枕草紙裝束撮要抄壺井氏義知作
 云清少納言かがかに安んじするとと者
 ゆるして毛又心けぬと云心よいゆり其安ん
 ハ淡也毒毒葉葉に杉乃横目の扇扇
 坐ちたる糸乃あちりをあいいむひ
 いよして心いゆる夏ありあまくい毛通
 飛く心むかくろく其たより子をある者
 かく○言滿再案千載集雜哥上
 一條院乃清時皇后宮又節奉らるる
 時辰乃日かつく十二人らハ志をけくゆ
 まであ銭まりをあんませくまりるに

兵部少云ある乃心けたりるをあまり銭
 むひくや云を聞く中將實方朝臣よりて
 けく海ふ心く
入後拾遺集
 足引乃山井の水をあまりをいぬるしを乃心けるるを
 心云を聞く返事によみ侍る皇后宮清少納言
 うんおあえにむいゆるをあまりかく日影ゆるはるり抄
 又壺安老人門身多田義俊撮要抄頭書に伊勢
 物語乃哥を引用ゆ勢語最證據心ける子
 足まり雖狀此哥出る處萬葉集卷第四
 紀女郎贈大伴宿禰家持歌二首其次日
 玉緒乎沫緒二搓而結右者在手後二

毛不相在目八方

女郎名曰小鹿也

予去乃西之親

を再案はる子あえせたる緒子从ハ合緒也

壺安乃説淡なり云子よきん淡き義なり

茶紫に沫緒望書たる故淡乃字を出たる

秋茶紫の字に多泥由かゝり又水引乃

あえせの糸毛こゝろあえをの類や至愚是

非す由まゝなるぬを替乃糸口を脱はる云

○紙捻水引之事紙捻乃始古昔無

懸緒直以テ纓ヲ結テ巾子ヲ而差簪故也本儀

紙縫謂懸緒束帶時公卿殿上人押並

用紙縫又用給紫組懸衣冠已下時也

懸緒紙捻也東帶衣冠直衣狩衣已下

皆用之然以紫糸組之承元二年四月後鳥羽

院蹴鞠御時始定給然故飛鳥井家執

奏トク勅許也元來蹴鞠烏帽子組懸也

免許人衣冠直衣時冠用給雖狀束帶

時必皆用紙捻又地下一向非免限於

武家侍從拜任後申受被用由也云云

右嘯翁先生乃傳書於壺井氏鈔物

略等同之又蹴鞠乃夏冬雲井春に委

○紙縫古古代の物糸組後在乃物

なり又今乃彩たる水引糸は清かりに

始たる未詳彩たる水引白紅を本様
以金銀及五色子彩たる不用なり但
連哥に多金銀乃水引を用ゆ有子細

○紅契冲説云吳藍也乃阿反奈なる
況免てかくいなり ○或説云紅花もや

吳國より來まんと吳乃藍云楚乃吳紅
乃吾國乃物之來て後又更に韓より來

まると殊よよ海一々まんと二度詞を冠
免て韓吳藍云又延喜式乃あるに云く

縫殿式に韓紅中紅退紅云時のか紅ハ
深紅乃名之なるなり轉一行を可知云云

○壺安老人云二藍も赤花及青花をそて
深之見たり赤花も青藍也青花

も青藍云そ云け故に二安ぬ云なる
也 ○或今曰赤藍も紅藍也和訓く

なるぬ云よなるも吳藍乃免くする訓なり
也いなり

○言滿云韓正字通曰河南切音寒 ○
吳五胡切音吾方言吳大也又國名大

伯始居之地顏師古曰吳言句者夷之
發聲也又三吳圖經云漢分會稽爲吳

與吳興丹陽爲三吳水經以吳興吳郡

會稽為三吳指掌圖以蘇常湖為三吳其說不同之略○紅湖同切音洪說文云帛赤色增韻云淺赤色釋名云紅絳也色似絳者也

○契冲云かゝるをたねお望云夏毛人乃在望なり
て神切皇后三韓を志た久給小後漸々に渡來云
○言滿云白紅乃水引ハかた一白かた一白かた一
小を以て染るなり赤色子あり次青黒色子
よまなり紅花者篤信孫玄達孫乃説子精一
略之

歌囊并蛙談卷之上終



任
420

